

戦争・記憶・喪

——韓国へのベトナム戦争記念物と忘却のポリティックス——

李 恵 慶 (大阪経済法科大学
アジア太平洋研究センター)

韓国のナショナル・アイデンティティとベトナム参戦をめぐる公的記憶

ある共同体のナショナル・アイデンティティと切っても切れない不可分の関係にあるのが、国家の危機に纏わる歴史的出来事である。韓国の近・現代のナショナル・アイデンティティ形成に至大な影響を及ぼす歴史的出来事としては、植民地時代の独立運動、朝鮮戦争、ベトナム参戦が挙げられる。

「大韓民国は、三・一運動により建立された大韓民国臨時政府の法統」を継ぐと、憲法前文に示されているように、独立運動の精神は韓国の国家としての基本理念となっている。また「民族相残（皆殺し）の悲劇」といわれる朝鮮戦争は、60年以上経った今もその記憶は生々しく、節目の年には大きな記念事業が国家プロジェクトとして実施されている。これだけを見ても独立運動と朝鮮戦争が、韓国のナショナル・アイデンティティ形成においていかに決定的な役割を果たしているのかは想像に難しくない。どちらも韓国に深い「傷」を残したトラウマ的出来事としてナショナル・アイデンティティ構築に欠かせないのである。

一方、ベトナム参戦はどうか。韓国軍の初めての海外遠征となったベトナム参戦もその例外ではない。だが、上記の二つの歴史的出来事とは根本的に異なる点があり、それによってアイデンティティ形成における位置づけや機能に違いが生じている。

韓国にとって独立運動と朝鮮戦争は当事者としての直接体験であり、そのためその記憶は「肉体化」されている。しかし、ベトナム戦争は参戦したとはいえ、遠い国の出来事であり、その距離感によって戦争の記憶は戦場とならなかった銃後の世界として二次的なものである。銃

後の記憶は、様々なメディアの介在により後次的に構築し直された、いわゆる「作られた」記憶として事実の歪曲や隠蔽などが生じ易い。当然、韓国へのベトナム参戦をめぐる記憶もそこから自由ではなく、ナショナル・アイデンティティ形成にも様々な矛盾や亀裂、対立といった葛藤が生まれている。

韓国へのベトナム参戦をめぐる公的記憶は、「反共戦士」「自由の十字軍」「国威宣揚」といった、きわめてステレオタイプ化されたものである。これらはすべて参戦を正当化する「大義名分」であったが、終戦から40年近く経った現在もそのイメージはさほど変わっていない。ベトナム戦争当時、アメリカの最も従順な同盟国として多くの兵力を送り込んだ韓国の被害は甚大だった。死亡者数だけで約5,000人——これは派遣韓国軍兵力の約1.6%に当たるもので、アメリカの1.7%とほぼ同じである——に達しており、他に負傷者と枯葉剤の後遺症に苦しむ元兵士が数万人とされる。

だが、ベトナム参戦をめぐる韓国の公的記憶に変化はほとんど見られない。こうした状況が、時より国論を二分するほどの激しい論争を巻き起こしながら、すでに「不名誉な戦争」「正義なき戦争」「負けた戦争」と称されたアメリカの状況と比べると、いかに異様であるのかは多言を要しない。そうすると、その両国の違いにベトナム戦争をめぐる韓国の記憶／忘却のポリティックスの特異性が集約されているのではないのか。それについて以下では、韓国へのベトナム戦争の終戦前後から近年の様々な社会的な動き・変化を踏まえて考えてみる。

ベトナム戦争の「悪夢」 ——「反共戦士」からタブーへ

韓国軍のベトナム派兵は、朝鮮戦争後、「反共」を国是としていた韓国ではさほどの抵抗もなく正当化された。しかも派兵の正当化に動員された「反共戦士」「自由の十字軍」という大義名分は終戦後、そのままベトナム戦争をめぐる公的記憶として定着する。

ただ、戦争がアメリカの敗戦で終わってしばらくは、韓国でも「触れてはいけないもの」「忘れたいもの」として語ることは回避され、沈黙を強いられた。これはアメリカでも同様であったが、「敗戦」のトラウマから目を背けたアメリカと違って、韓国の場合は朝鮮戦争とその後の南北分断という特殊な社会的事情によるものであった。ここでは、そうした特殊な事情とアメリカの敗北とが生んだ韓国政治社会のねじれを、「アメリカン・トラジエディ（アメリカの悲劇）」に因んで「コリアン・トラジエディ（韓国の悲劇）」と呼んでおこう。

アメリカの撤退＝敗北によってベトナム戦争は終息したが、それを認めなかったのは当のアメリカよりも、むしろ韓国の方であった。国会では「凱旋派越国軍将兵に送る感謝決議」が採択され、韓国軍の「自由守護」「国威宣揚」「名誉ある凱旋」が称えられた。アメリカが負けても韓国は負けるどころか、その「勇猛な」戦いぶりがさらに強調され、まるで戦争に勝利したかのような錯覚を覚えさせるという、ベトナム戦争はさわめて皮肉な戦争となっていった。

だが、ごまかされていたベトナム戦争の記憶が、最悪の悪夢に変わるまではさほど時間がからなかった。というのも、1975年4月サイゴンが陥落し、南ベトナムが北ベトナムに統合されてしまったからである。朝鮮戦争後、強い「レッド・コンプレックス」に苛まれていた韓国では、南ベトナムの敗北＝「共産化」は他人事ではありえず、政府の「第二の（南）ベトナム＝韓国」への恐怖は直ちに屈折した形で顕現する。サイゴン陥落直後に発布された「大統領緊急措置9号」が正しくそれである。

韓国では1972年からすでに、北朝鮮の「侵攻＝南侵」可能性を理由に「全国非常戒厳令」が公布され、維新体制に入っていた。それは、ベトナム戦争の真っ最中の1968年に発生した北朝鮮のゲリラによる青瓦台襲撃未遂事件や、その後の在韓米軍削減の発表など、様々な要因に

よってもたらされた。その中で国民の自由をより制限する「大統領緊急措置9号」が発布され、韓国の政治はさらに険しいものとなる。言論・集会・結社の自由はすべて禁じられ、流言飛語やその措置の誹謗までもが処罰の対象になるなど、文字通りの暗黒の時代が始まった。

当時の政権にとってサイゴン陥落＝ベトナムの共産化は、根柢のない北朝鮮の侵攻と国内反乱への恐怖を増幅させる「悪夢」だったのであり、それはやがて、金栄鎬も指摘したように「軍内のクーデター、戒厳令、軍の市民への発砲、軍法会議での反対派処刑のアクセルとして作用」する。かくしてベトナム参戦の記憶は「共産主義侵略と自由越南敗亡の脅威」によってタブーとなり、忘却の彼方に追いやられる。

ベトナム戦争の再文脈化と社会的亀裂、そして公的記憶の変容

ところが、韓国の社会の変化とともに、タブーとなっていたベトナム戦争が長い沈黙を破り再文脈化される。最初のきっかけは、1992年アメリカに先んじて行われた韓国とベトナムの国交正常化であった。これによって韓国では忘れられていたベトナム戦争の記憶が、頑なに閉ざされた記憶の扉を動かし、大きく変容を迫られることになる。

ベトナム戦争の再文脈化は以下の異なる二つの形で行われた。まず一つは、韓国とベトナムの政府による再文脈化である。両国の国交正常化の共同声明に署名した韓国の外務省長官（外相）は、「一時期、両国の間に不幸な過去があったが、これからはそれを乗り越え、未来志向的な関係発展のために緊密に協力していく」と、韓国のベトナム参戦を「不幸な過去」と曖昧にしながらも初めて言及した。これに対し、ベトナムは「われわれは戦争で勝利した。韓国からの謝罪は必要ない」と、「過去」に拘らないという姿勢を示した。

ここで注目すべきは、まず韓国政府の「不幸な過去」という参戦の曖昧化である。政府は現在もそうした姿勢を貫いており、一応初めて「謝罪」したといわれる金大中政権においてもそれはほとんど変わらなかった。二度に及ぶ「謝罪」において、「不幸な過去」に対する「遺憾」

が、「国民に苦痛を与えた」点について「申し訳なく思う」へ変わっていたが、ベトナム戦争や参戦という言葉は頑なに避けられていた。その「謝罪」に対しては韓国国内でも疑いの声が少なくないが、何よりも看過できない問題は戦争の曖昧化である。それによる過去の単純化と戦争責任のごまかしとの密接不可分の関係は、これまでの歴史からしても疑う余地はなく、それが続く限り真の和解などありはしない。

それなのに、またもベトナム政府は「謝罪はいらない」と、経済発展最優先のために韓国政府による戦争の曖昧化・ごまかしに目を逸らし、背を向けてしまう。これが何を意味するのかわからないまでもなからう。誤解を恐れず端的にいうと、これまで「政治の忘却」を押し進めた韓国と、「忘却の政治」を打ち出したベトナムによって、ベトナム戦争は再び闇に葬られたのである。

もう一つの再文脈化は、市民らによるものである。これは先ほどの政府間のやり方とは相容れないものとして表れた。ハンギョレ新聞社が発行する週刊誌『ハンギョレ21』に掲載された、韓国軍のベトナム民間人虐殺に関する記事がそのきっかけとなった。

『ハンギョレ21』の報道は、1999年5月の「ああ、震撼の韓国軍」と題された記事を皮切りに、「ベトナムの怨恨を記憶せよ」「われわれの恥部に光を」などの記事が2000年9月まで46週間掲載された。生き残りの証言をもとに描かれた虐殺の詳細は実に生々しく、ベトナム人たちが終戦後の経済的困難の中でもいち早く虐殺事件記念館（1976年）を建て、無数の韓国軍憎悪碑——金賢我によると「憎悪碑」は、「過去に蓋をし、未来に向かおう」というベトナム政府の「未来志向的」な姿勢を反映し、1980年代に入ってからはその名が「慰霊碑」に変わったという——を建てていたことが伝わると、韓国社会に衝撃が走った。

偶然の一致だろうか。同時期韓国では、アメリカ軍による民間人虐殺事件である「^{クワンリ}老斤里事件」が発覚し、大きな社会問題となっていた。アメリカに対する怒りが、ベトナムの民間人虐殺被害者へ同病相憐れむ気持ちをもたせたのだろう。「アメリカに老斤里虐殺事件の真相究明と贖罪を求めるならば、まずわれわれがベトナム

でしてしまったことについて自ら責任を負わなければならない」（『ハンギョレ新聞』、1999年12月1日付けの記事）と、韓国軍の民間人虐殺に対する反省と責任の声が国民を巻き込んで広がった。その結果、「恥ずべき過去を認め、反省しよう」という『ハンギョレ21』のキャンペーンには多くの賛同と寄付金が寄せられ、2000年初頭には「ベトナム戦争民間人虐殺真相委員会」という市民団体も結成された。

こうしたベトナム民間人虐殺をめぐる一連の流れと広がりとは、1990年代に起きた韓国の社会的変化と無関係ではない。韓国では1993年の初の文民政府の誕生によって、長い間続いた軍事独裁政権がようやく終わりを告げ、様々な変化が起きた。その中の一つが、これまで闇に葬られていた韓国の近・現代史をめぐる問い直しであった。1948年の4・3事件や朝鮮戦争時の民間人虐殺事件、光州民主化運動等がその代表的な例である。「正史」から排除され、過去の歪曲と歴史の忘却を余儀なくされていたトラウマ的出来事が、次から次へ掘り起こされ、見直されていった。『ハンギョレ21』に促されたベトナム民間人虐殺に対する国民的な反省ムードとキャンペーンへの多くの賛同は、そうした歴史の問い直しの延長で行われたものといえる。

韓国軍による民間人虐殺の真相が明らかになるにつれ、従来のベトナム戦争の公的記憶における「反共戦士」「自由の十字軍」といった強い男性性に貫かれていた韓国軍のマスター・ナラティブに深い亀裂が走った。中でも『ハンギョレ21』や民間人虐殺の真相究明に励む市民団体に強い不満を示したのは、ベトナム帰還兵たちだった。

ベトナム戦争終戦後、元兵士らは一応「凱旋」帰国となったものの、すぐにその存在は二重に引き裂かれてしまう。すでに述べたように、一方では「反共戦士」「自由の十字軍」として「英雄化」されながらも、他方では南ベトナムの敗亡による「悪夢＝恐怖」から「忌まわしいもの」として周縁化され、忘れ去られていった。ベトナム戦争の加害者でもあり、韓国政府に裏切られた被害者でもあった彼らにとって、『ハンギョレ21』の記事で引き立てられた、卑劣で残忍極まりない「虐殺者」「戦争犯罪者」という加害者のイメージは、自分たちに対する糾弾

として映り、受け入れ難いものがあったのだろう。その不満がやがてハンギョレ新聞社乱入事件や、「ベトナム戦争と韓国軍派兵に関するシンポジウム」への妨害に発展してしまう。だが、ベトナム帰還兵といっても一枚岩でないのはいうまでもなく、中には上記の強硬手段に対し、言論への暴力と批判する人もいた。

いずれにせよ、韓越国交正常化とそれによる両国の和解ムード、文民政権における歴史の問い直し、『ハンギョレ21』のベトナム民間人虐殺発覚記事とその真相究明のための市民団体の結成などといった、1990年代の韓国の社会的・政治的地殻変動による様々な変化からベトナム戦争・参戦は韓国軍の民間人虐殺を中心に再文脈化され、公的記憶にも大きな変容がもたらされた。

和解の（不）可能性

—韓越平和公園とハミ村慰霊碑を例に

韓国へのベトナム民間人虐殺への高い国民的関心と真相究明の動きは、ベトナム帰還兵だけでなく、「歴史に蓋をし、未来志向的」な姿勢を標榜したベトナム政府をも戸惑わせた。それは言論規制の動きとして表れた。ユン・チュンロによると、ベトナム国内のマスコミには報道規制が、国外のマスコミには取材規制——実際、韓国軍民間人虐殺に関する取材の申し込みを行ったライター通信に許可が下りなかった——が取られていたという。

そうした状況の中で、ベトナムでは韓国人の援助による二つの戦争関連記念物が建立される。『ハンギョレ21』のキャンペーンによって造られた韓越平和公園（以下、平和公園）と韓国へのベトナム参戦戦友福祉会（以下、戦友会）の援助によるハミ村の慰霊碑がそれである。それらの建立背景は和解のあり方を考える上で大きな示唆を与えている。

まず、平和公園からみてみよう。

平和公園は『ハンギョレ21』のキャンペーンの寄付金から、ベトナム参戦当時、韓国軍が最も多く駐屯していたフイエン省に造られた戦争メモリアルである。ハンギョレのキャンペーンは、民間人虐殺の記事掲載から約5か月後の1999年10月から2003年2月まで行われ、約1億

5,365万ウォンの寄付金が寄せられた。ベトナムの南中部に位置し東は南シナ海に面したフイエン省は、戦争当時、アメリカ軍や韓国軍らによる22件の虐殺事件と1,729人の犠牲者が出た、ベトナムでも被害が大きな地域である。その意味では「恥べき過去を認め、謝罪」するとともに、虐殺の記憶を忘れないためのメモリアルを建立するには最も相応しい場所といえる。

『ハンギョレ21』によると最初は学校を建設する予定だったが、途中で病院に変わり、最終的に公園になったという。計画変更には金銭的な問題が大きかったが、他に学校と病院建設に韓国政府から大きな支援があったことも理由の一つだった。韓国は2000年からベトナムの中部に位置する5つの省に40校の小学校建設事業を実施し、さらにベトナムの国家主席が韓国を訪問した2001年には病院建設にも援助を約束した。こうした流れから韓国軍へのベトナム民間人虐殺への反省の徴は平和公園となり、2002年4月に着工され、翌年の1月に竣工した。

市民主導による「過去清算」のシンボルとして造成された平和公園は、ベトナム戦争の公的記憶に対抗し、新たな記憶を紡ぎだす開かれた「場」と評価できよう。こうした公園の意義は、それとほぼ同時期に韓国の戦友会の援助によって建てられたハミ村の慰霊碑と比べるとより明確になる。

ベトナム中部のクアンナム省に位置するハミ村は、1968年韓国軍によって135人の民間人が犠牲になった「ハミの虐殺」があった集落である。この村の人びとの虐殺の記憶や慰霊碑建立については金賢我の『戦争の記憶 記憶の戦争』（2002年）に詳しいが、それによると慰霊碑建立の際に碑文の内容をめぐるトラブルがあったという。

碑文には当時の韓国軍の虐殺の様子が生き残った住民の証言から忠実に再現され、深い悲しみと怨恨が色濃く滲み出ている。最後は、「韓国軍がここを再訪し、恨めしい過去を認め、謝罪した。そして赦しのうえに、この碑石を建てたのである。／私たちは人道的な仁義によって故郷の発展と協力を遂げることになるだろう」と、未来志向的な内容で締め括られてはいるものの、その直前には「ここは血に染まり、砂と骨とが入り交じり、家は焼かれ、火に焼かれた死

体がからみあい、焼けた死体をありがかじり、血のにおいが満ち満ちていた」「戦車で遺体を踏み潰した」「魂は眠れず、あちらこちらをさまよい、憤怒は青天にまで達した」という虐殺の生々しい様子が描かれていた。それを目にした戦友会はむろん、韓国政府関係者らも内容の一部削除と語彙の修正を求める。

そうした圧力に対してベトナム政府と村の住民の間にも意見の相違があったが、村の人びとが最終的に選んだのは文章の削除と修正ではなく、「歴史を歪曲するよりは消してしまおう」といって碑文の上に蓋をすることであった。碑文は蓮の絵柄の石版で覆われ、闇の中に閉じ込められたが、それが却ってこの慰霊碑を実際に歴史に「蓋」をした象徴的な記念物としている。

ここで看過してはならないのは、そもそもこの慰霊碑の建立が建設費を負担した戦友会の自己中心的な欲望によるものであったという点である。ユン・チュンロは2001年の着工式のパンフレットから、この慰霊碑は「ベトナム戦争犠牲者」のために建立されたものであるが、戦友会のいう「犠牲者」の中にはハミ村の虐殺被害者だけでなく、参戦していた韓国軍も含まれていると指摘する。「赦しと和解で戦争の傷を癒やそう」という戦友会会長の訴えかけの裏には、韓国だけでなくベトナムにも参戦記念碑を建てて自分らを顕彰し、戦争の「傷」を癒やしたいという戦友会の強い欲望が見え隠れしていたのである。その意味では、ハミ村の慰霊碑は「慰霊碑」というよりむしろ「ベトナム参戦記念碑」といわなければならない。

平和公園とハミ村の慰霊碑の違いは一目瞭然である。慰霊碑は、顕彰の対象を「ベトナム戦争犠牲者」と曖昧にすることで、ハミ村の犠牲者だけでなく、亡くなった韓国軍の追悼と名誉回復、さらには生き残った者たちの罪＝「傷」を癒やしたいという戦友会の自己中心的で閉鎖的な欲望が露呈された「参戦記念碑」であった。それに対し、平和公園は公式記憶に対抗する新たな記憶の生成の場として、真相究明と犠牲者への赦し、歴史への反省をもとに「和解」の可能性を模索した、「不幸な歴史」を記憶し続けるためのメモリアルである。

しかし、平和公園の建立をめぐるまったく問題がないわけではない。ここでは深入りしな

いが、そもそもハンギョレのキャンペーンにナショナルな意識が横たわっていたのは否めなく、その意味ではすでに限界を孕んだものであった。現在、韓国からの支援もなく、高い維持管理費に苦しまされ、公園としての機能を十全に果たせていない姿は、それと無縁ではなからう。平和公園は和解の難しさを端的に示す例でもあるが、だからといってその意義が色褪せることはない。

聳え立つベトナム参戦記念塔 ——英雄物語の再生産と「癒し」へ

平和公園とハミ村の慰霊碑の建立の後、韓国の各地にはベトナム参戦記念塔が雨後の筍のように建てられた。きっかけとなったのは、「6・25戦争（朝鮮戦争）50周年記念事業（以下、記念事業）」という国家プロジェクトであった。これは名の通りに朝鮮戦争50周年を記念するもので、2000年6月25日から2003年7月27日まで約3年間、300億ウォンの規模で行われた。

記念事業の目的は多岐に渡っていたが、大きく「戦争犠牲者の追悼と名誉回復」「戦争未経験世代への正しい歴史観・国家間の確立」「朝鮮戦争参戦国との紐帯強化」「国威宣揚」「国家イメージ改善及び国際競争力の強化」の5つに分けることができる。そしてその基本目的に沿った39個の具体的なプロジェクトが政治・経済・文化・教育・福祉・外交など、あらゆる方面から推進された。

記念事業の中で大きな割合を占めていたのは、戦争関連記念物の建立事業であった。これによって全国に新たな戦争関連記念物が多く建てられたが、注目すべきはその対象が朝鮮戦争だけでなく、ベトナム戦争にまで拡大されていたことである。そもそも朝鮮戦争50周年を記念して行われた国家事業が、なぜベトナム戦争まで対象とすることになったのか。それは事業における朝鮮戦争の捉え方の変化にあった。

韓国では、1950年6月25日、北朝鮮の南侵＝武力侵攻によって勃発した民族相残の悲劇というのが最も一般的な朝鮮戦争の捉え方である。記念事業では、その朝鮮戦争における「北朝鮮」対「韓国」の二項対立構図が、「北朝鮮」対「韓国・UN連合軍」として捉え直された。これは

先述の事業目的の「朝鮮戦争参戦国との紐帯強化」と不可分、「国威宣揚」「国際競争力の強化」とも無関係ではない。そのためか、この時期に建てられた朝鮮戦争記念物は、UN連合軍の活躍や参戦国との紐帯関係が強調されたものが多い。釜山のUN彫刻公園（2001年）——展示作品は朝鮮戦争50周年記念国際シンポジウムの出品作で、作家は全員朝鮮戦争参戦国出身である——や、京畿道東豆川市の自由守護博物館（2002年）がその代表的なものである。



UN彫刻公園竣工記念塔



UN彫刻公園内の展示作品の一つ
（作品名:記念碑、作家:ロジャー・マクファーレン、国籍:豪州）



自由守護平和博物館敷地内の設立記念碑



ベルギーから友好の徴として寄贈された小便小僧（自由守護博物館敷地内）

「朝鮮戦争参戦国との紐帯強化」を重要な目的の一つとしていた記念事業では、朝鮮戦争を北朝鮮に対する韓国・UN連合軍の「自由守護」の物語として再構築することで、その目的を達成しようとした。そしてそうした韓国及び連合軍のさらなる「自由守護」の物語として位置付けられたのがベトナム戦争である。こうした戦争をめぐる韓国の自己中心的な再解釈・再構築で看過できないのは、それぞれの戦争の曖昧化はむろんのこと、さらにはベトナム戦争が韓国の国威宣揚というまったく別の物語へ横滑りしていることである。これは、穿った見方をすると、ベトナム戦争史が韓国のナショナル・ヒス

トリーへ組み込まれ、包摂されたとさえいえる。

そのためか、記念事業実施中やその延長線上で建立されたベトナム戦争関連記念物の多くには、戦争当事者のベトナムやアメリカについての言及は最小限にとどまっている反面、韓国軍の参戦部隊や参戦者の名前が際立っている。ベトナム参戦記念塔はその好例である。



ソウル市の「越南参戦記念塔」の一部の様子。ここにはベトナム参戦兵約4,500名の名前が刻まれ、彼らの戦功が称されている

どこの参戦記念塔にも必ず地域出身の参戦者全員の名前が彫られているが、特徴的なのは死亡者と生存者の区別はまったくないという点である。それによって多くの犠牲を払った「敗戦」の「悪夢」はきれいに消され、ベトナム参戦者は再び「自由の十字軍」として世界の平和のために戦った「誇らしい」英雄として表象され、新たな物語と記憶が集合的に紡ぎ出されている。

また、ベトナム参戦記念塔には建立理由として戦死者への追悼の念が記されているが、それは決して戦死者のためのものではない。そもそも「慰霊碑」ではなく「参戦記念塔」という名が示すように、それには参戦者の顕彰を通じた生存者の名誉と承認、さらには社会的待遇の改善や地位向上という現実的課題が含まれている。前述の、戦友会の「韓国にもベトナムにも参戦記念碑を建てたい」という欲望はそれと無関係ではない。

韓国に至る所に高く聳え立ったベトナム参戦記念塔によって、ベトナム参戦は英雄物語に再構築され、帰還兵らは世界の平和に貢献した勇敢な「自由の十字軍」として復活する。そこではもはやかつての民間人虐殺の張本人としての姿はきれいに拭き取られている。亡霊の如くよみがえったベトナム戦争をめぐるナルシスティックな男性性のマスタ・ナラティブは、和解ど

ころか、歴史をねじ曲げ、その背後に後退した夥しいベトナムの戦死者・犠牲者を再び忘却の彼方へ追いやっている。これは「二次虐殺」に他なるまい。

「喪」の作業へ——「ベトナム参戦勇士の交流の場」をめぐる

ベトナム参戦記念碑乱立の中、最近「ベトナム参戦勇士交流の場（以下、「交流の場」）」というきわめて異様な戦争記念物が登場した。これが建てられているのは、韓国の東北に位置する江原道華川郡看東面五音里という村である。その地域一帯は、ベトナム戦争当時、派兵将兵の訓練場が造られ、兵士のほとんどがそこでの訓練を経てベトナムに送り込まれた、ベトナム参戦兵たちにとっての「記憶の場」である。「交流の場」の関係者によると、そこに大規模な訓練場が造られたのは、山々に囲まれた地形がベトナムのジャングルと似ていたためという。

「ベトナム参戦兵士たちに交流の場を提供し、世界平和に貢献した歴史的場所を後世に伝える」（公式ホームページ）ことを設立目的とした「交流の場」の建立には、実に長い年月が費やされた。1998年から2000年にかけて建立計画が立てられ、建設にも2001年の着工から2008年のオープンまで約8年もかかった。工事は二段階で行われ、第一段階（2001年から2006年まで）では、ベトナム参戦記念館、平和守護参戦塔、追悼碑、内務班体験場、食堂、野外展示場、軍事基地、訓練体験場、ピークニック広場、大・小



「ベトナム参戦勇士交流の場」のベトナム参戦記念館。参戦記念象徴塔の左右にはベトナム戦争参戦国の国旗が靡いている

運動場、炊事棟（復元）といった主な施設が、第2段階（2007年から2008年まで）ではクチトンネルやベトナムの民家などが再現された。

「交流の場」の最も重要な施設はいうまでもなく、ベトナム参戦記念館である。まるで五音里を見下ろすかのように、敷地の最も奥の高所に建立されたその記念館は、他の戦争関連記念館にはない機能が担われている。それは戦争の正当化といった単純なものではなく、より根元的な事柄に関わっている。

参戦記念館は特別展示室を含んだ四つの展示室と一つの映写室で構成され、ベトナム戦争関連資料が展示されている。展示室は一階の第一展示室から、二階の第二・第三展示室へと順に回っていく——三階の第四展示室は特別展示場として普段は立ち入りが禁止されている——仕組みになっており、ベトナム参戦の物語が派兵から戦没者への追悼まで、一つの完結したストーリーとして展開されている。

第一展示室では、主に韓国軍のベトナム参戦から終戦までが時系列に語られ、特に大きな戦功を挙げたとされる戦闘と「英雄」たちが紹介されている。第二展示室では、ベトナム参戦による経済的効果を中心に、一方では韓国の著しい経済発展を「新生独立国の手本」として美化しつつ、他方では戦争の「傷」と「痛み」をどのように癒やしていくべきかが、両国の歴史的共通点から力説され、最後は韓国軍とベトナム人との仄々しい交流のエピソードが紹介されている。第三展示室では、第二展示室で紹介しきれなかったエピソードから始まり、だんだん戦死者の物語へと変わっていく。そのクライマックスは出口近くに並ぶ戦死者のパネルである。



ベトナム参戦記念館第三展示室の戦死者追悼パネル

部隊別・ハンゲルの文字順に戦死者の名がびっしり刻み込まれた黒い半透明のパネルが両側に立ち並び、まるでトンネル＝洞窟を連想させる。そのいささか閉鎖的な空間に一歩足を踏み入るとこれまでとは異なる独特な世界が広がる。黒いパネルは鏡のように通る人の顔を戦死者の名前の上に映し出し、戦死者と自己同一化を促し、足を運ぶ度に誰もが「なぜこんなことになったのか」と呟き、メランコリックな気分になる。

ここで行われる戦死者との自己同一化にはきわめて重要な意味が込められている。端的にいうと、それは「喪」の作業である。先述したように、ベトナム参戦記念塔は戦死者の追悼よりは生存者のためのもので、そこでは嘆き悲しむことは抑圧されている。それを初めて可能にする場が、この黒いパネルのトンネルである。参戦記念館の横に立てられている「越南参戦勇士追悼碑」もこの建物が追悼や喪と不可分であることを象徴的に物語っている。

「喪」の作業の意味を明らかにするためには、フロイトのいくつかの書物を参照しながら論じなければならないが、ここではとりわけアメリカのベトナム戦争戦没者慰霊碑を国民的な「喪」のシンボルとして見なし、その役割について鋭い指摘を行った阿部博子の見解を援用しながら、「交流の場」で促される「喪」の作業の意味を考えてみる。

ワシントンのナショナル・モールというきわめて象徴的場所に建てられたベトナム戦争戦没者慰霊碑は、つとに「ナショナル・モーニング（国民的追悼）」と呼ばれ、「喪」と不可分であった。そうした見方をより深化させた阿部博子は、「喪の共同体——ナショナル・シンボルとしてのベトナム・ベテランズ・メモリアル」（『アメリカ史研究』第32号、2009年）という論考のなかで、その慰霊碑の前で喪失の対象＝戦没者に向かい合い、それを癒しに転換してゆくアメリカ国民の喪の作業に注目し、慰霊碑の機能について次のように述べる。「嘆き悲しむ自らの姿を戦死者の名前のうえに映し出すことによって、黒御影石の壁面は、まさに生存者が戦死者に同一化するスクリーンとして機能」しており、その意味でベトナム戦没者慰霊碑は「集団によってなされる『喪の作業』」を通じて、そこに『喪

の共同体』としての想像の共同体を出現させる集合的記憶の場」である。これに従うと、アメリカのベトナム戦没者慰霊碑は、戦死者への国民的悲しみを通じた国民の「和解」「統合」「癒し」が行われ、より強固な紐帯が築かれる国民的な喪のシンボルとなる。

戦死者との自己同一化が促され、メランコリーに陥る「交流の場」の黒いパネルも上記のアメリカの戦没者慰霊碑と類似した機能を担っているといえる。ここで重要なのは、そうした喪の作業を通じた記憶と忘却の政治がアイデンティティの変容をもたらしていることである。

嘆き悲しむことは喪の作業において欠かせないものである。フロイトによると、悲哀（メランコリー）は喪を不可能にする病的なものではなく、むしろ喪の完遂のための前提条件である。そして喪の作業では喪失の対象との自己愛的な同一化によってアイデンティティの変容が行われる。それが「交流の場」では、戦死者との自己同一化により自らを戦争の犠牲者として同定し、加害者としての立場を忘却する——もちろん、これはアメリカの慰霊碑も同じである——ことである。その意味では、戦死者のパネルはジェームズ・ヤングのいった「忘却のためのモニュメント」に他なるまい。

喪の作業とそれによる記憶と忘却の政治は、韓国軍の民間人虐殺によってできた国民の亀裂を縫合し、エルンスト・ルナンの国民の定義を引用するまでもなく新たな想像の共同体におけるナショナルな主体を形成する。ベトナム参戦記念館の展示のテーマが「理解と和解」であるのは偶然ではない。

結局、戦死者の名が連ねられた黒いパネル＝スクリーンのトンネルは、戦死者との自己同一化から国民的な喪を促す喪のシンボルであり、喪の作業を通じた国民的「理解と和解」をもたらす象徴的な場なのである。これこそ、「交流の場」の最たる特徴であり、その意味では韓国のベトナム参戦をめぐる記憶／忘却の政治が集約されているといえる。

（本稿は公益財団法人トヨタ財団の2011年度研究助成による）